

ホ 2
4432

ホ 2
4432

東京
学校
圖書

刊
392

言靈徳用

言靈此さきはふ國言あまのきけくる國とて神代より言

傳へたる古語なり言靈とて人のいひつづる言語に自靈

異なる神魂のそなるりてあるを云さきとふといふとへ

ば一物を二も三もなす榮えしめ禍きことを避て福

ら志むるやうのことなりあをくるとはふとへは凶きこ

とよあをむとし危き所よおちいらむとをるを救ひあげ

て吉らしめ安からしむるやうのことなりこれ二を言

語の神靈れ執まあるひ行ふをさしていへるなりかむあ

言靈徳用

言靈徳用

其のことハ、古學フルトマシをるきはの人ハ、わきまへ志りあること
なれば、今こと新ウレマシくいふまでもなきことなれど、幼學ウレマシの
とめよ、姑ハシ具ハシよ諭ハシくおくのみなり、かくて天地の間ハ萬の
事は、いひもてゆけば、このさきむひとほくる言靈の一ハシ小
もろくことなるきを、中アサシごろ異國アサシの聖人の教といふもの世
も行われて、天下の事ハ、道理を本とし、文辭を末とせるこ
と、自然人の心けそこよ志みつきて、言靈のいともとふと
く奇異アサシく微妙アサシなる理ハ、年月よ埋アサシまきふくを、後つひよ天
下の政を、武家より執アサシ申すこと、となりて、言の葉ハ、まぢ
をどつ志らぶることハ、歌よこの一ハシのまさみのごとくな

アて、はてその歌よむことは、雲の上人きてハ世きて人形
どのもてあそびのやうよなりもてゆきて、女メくくを
やびとるをさみよして、武士モウシなどのもてあそびよハ、ふさ
をくらぬことのごとくよなれるハ、又いみじき世の變アサシ
なり、志らるを近き世となりて、古學の道ひらけくより、今
は天下四方よ行わたりて、田舎のはてまで、古風を信じる
徒の出來ぬるハ、言ハシよありがさき世のはがなり、それよつ
きて、數百年ヤハトうづもれば、てより言靈もかづく現れ出來
て、殆古よ立ち癒るべくなりぬるハ、これをはきをひき
くる志るく正しくして、ふとむべく仰ぐべきことのか

きりよそありける。いでその言靈れをぐれて清くあざや
らふ。正しく尊きことも。皇朝ハ。天地の間よあらゆる萬國
を御照し坐すに。天照大御神の大御裔の皇統高御座よま
しるして。天地のむと動きなく。無窮よ傳をり坐て。千萬御
代まで天下を統御を御國なれば。懸まくも可畏き天皇の
尊く坐まはること。天地の間よ二なくして。萬國の大君よ坐
ませば。外國くの首領どもとハ。かけてもひとしなみ。お申
すべき理よあらば。如此尊く萬國よ宗とる御國なるが故
よ。稻穀をはしめ。千の物も萬の事も皆勝れて美き。ふつれ
て。人の音聲言語の正しく美きことも。はるらよ萬國よ優

れよまはなり。はるむ上よ云ること。言靈を主とる御
國よて。それ言靈ととも。皇統の稜威のみさありよま
る。て。天地と遠長く。言靈のさきむひとをくること。お
あれ。ばかりよも古學をる人ハ。おならけよ意得べきこと
よ。あらば。外國のさへづり言ハ。すべて濁る音多く。其餘種
種の不正言これよまありて。鳥蟲器物の聲よ類ひて。こよ
なく。いやし。な。御國と外國の言語の優劣尊卑のこと。わ
る。ハ。既よ本居氏漢字三音考よ辨云。これハ。言語の正不正
の論ハ。殆盡ぬるごとく。なれども。その言さるハ。あまつひ
つぎの稜威と共よかどやき。皇統の稜威ハ。言靈のさきは

ひよよりて、をぐれさることわりを^{カムカ}検察て、深くさふとみ
厚くあふくべきことわりをおもさば、てハ、あらぬこと
と知べし、かくて御國の古言ハ、凡て五十音の外よ出る不
正音聲を、是よ可^カ佐^サ多^タ波^ハ四^シ行^{キョウ}の濁音合せて二十を加ふ
れば、都て七十音となれども、御國の古言よ、を倍て濁る音
をくなく、その濁音ハ正しき定式ありて、古ハみだりよ清
濁通し、いへる例もなく、後世の如くをさく誤り唱ること
もなく、つゆまぎるゝこともなからざれば、その濁音ハ
五十の清音よ攝^{カケ}て止ぬるハ、謂^{イハ}はることおるべし、さてそ
の濁音よ定式あてて、みどりならざりて、證^カハ、香^カ木^キなどの

如く、一音の言よ濁る例なく、又神^{カミ}の^カ君^{キミ}の^キな^ノどの如く、
二音の言よも首を濁る例あることあり、三音四音の言も
又此よ准て知べし、濁音ハ、連聲の便によりとると、二
音三音等の言ハ、中尾よあるのみなり、はてその連聲の便
よよりて濁ると云ハ、川^{カハ}をも山^{ヤマ}川^{ガハ}など、云ときハ、カ^カを假
よ濁り霧^{アサギ}をも朝^{アサ}霧^ギなど、云ときハ、キ^キを假よ濁るゝごと
し、言の中尾よて濁ると云ハ、長^{ナガ}の^カ流^リの^カ瀧^{タキ}の^ギ限^カの^ギ
などの類なり、はて一音の言ハ、さらよもいへば、二音三音
等の言よても、首^{シメ}を濁る例なきことむ、古言ハ、さらよて、後
の世此今よ至るまで、うるを、ナキ歌詞などよ、百よ一もま

トへさることあることなり。中昔以來の物語文などの中
まましく首も濁るべき言のまづれることのあるは、こや
く人の口語にいひなれさる。漢國佛國などの言をそのま
まおかけるものなれば論なし。又寄居子紅班など首を濁
て唱るは後世世俗にて古よ例なきことなきは、さらば證
とせらるよさらば萬葉の歌ふまれば檀越や然も勿云を云
云。或は婆羅門の作れる小田を云くなど云ることのある
を外國の首も濁る言をそのまづよめらるよて、もとより
いひきされる御國言といひきることおいと合耳さちてい
やくくきとなくきとゆるを思ふべし。かやうの言の歌詞

なごよは、はらよ一もまづへてよむまづき理なれど、かの
歌ごもて古今集おいてゆる俳諧歌の類よして、今一きを
滑稽でわざといやくき詞などをまづよみて、人の笑ひ
興すべくかまへさるもけなれむ。正雅き言もてうるを
くよゆる歌とを別ことなり。かくいやくき詞もていへる
歌を一時の戲言なれば、をさくしき歌集などよまづへ
載べきよあらざれども、か此集ハもときよくえらべる集
ならびきくふとふひ見るよつけて載さることなれむ。
はしてぞむべきことよあらば、さて外國言ハ姑、さて
おき御國言を今より不清假濁濁半舌と四種三品よ名目

を立て、その尊卑優劣をいふ。清ハ上ニ位シ。假濁ハ中ニ位シ。濁半舌ハ下ニ位するなり。上ニ位するハ、かけまくもかゝこけきども、即チこれ天子ニ配リ。中ニ位するハ、保佐ニあり。下ニ位するハ、臣下ニ配レ。そむく萬ノ物ハ、清亮ニ正雅きを尊むことハ、萬國一致する理なれど、千ノ物萬ノ事、清亮ならざれば、人の音聲も清亮ならざれば、千ノ物萬ノ事、清亮なれば、人の音聲も清亮なること、可なり。其ハ實ニ皇神の大御功德ニつるゝことにて、幽冥不測、自ら然るごとく、むをるゝことなれば、はらみ人の力も及ぶべき。さぎでよあらば、かゝとくも天照大御神ハ、撞賢木嚴之御魂

と御自御名のり多まへるハ、大御徳の天地の間はいさゝろもいとらぬくまらる。照りわたりとあらせとまへるが故なり。嚴といハ、清亮潔白なることのかぎり。をいふ古言なり。かく大御徳の盛隆ましくて、かぎりなく清潔なる天日の大御神の御子、尊み坐して、皇統高御座の天地はむと動く事なく、無窮ニ傳り坐て、萬千秋の五百長秋ニ、天下を統御す萬國の大君、お坐ませバ、外國もろくの首領ども、實ハ臣と稱して、るやまひまつり尊ひるつり、服従來べき理なれば、ま申て御國のかぎり、かさらよもいとを、外國もろもろの首領どもよりも、假も皇朝おむきるつり、犯

しまつることあそとざるハ、純粹潔白よして、上は居て尊
き道理の著明イナシレければ、天地のはじめより、よりあひのきを
み、うらやす國よして、喪なく事なく平けく安けくあきば、
ことさらは稜威イをかざりて、おどしとるへることもしも
なく、又言語をかざりて、うつらひとまへることもしも、漢
國よて、己が治シラせる國を華夏中國など、わきだけくいふ
とねもへむ、みづから天子と名のりをるもの、寡人不穀
などもゑりくだりいへること、はよのことなり、其ハもと
人民をなつけまつろをせむとめよ、或ハねどし、或ハゑつ
らへる術シヤよて、實ハ清精ならぬ、そて濁粗ニれるとわさよて、

御國とハ反對ウラウなる趣なるをよしく思ふべし、されば御國
のことを事よふれても中國華夏など稱イヒすること、古より
をさくなきふハ、あらねども、其ハ謂イハありて止こと得ず
いて、まれよあひへること、あやしくよて、上古よりけ
むりてハ、御國を大八島オホヤシマ、或ハ葦原中國アシハラなど稱イハし、天皇をハ
須賣良美許等スメラミコト、或ハ大君オホキミなど申すこと、つねのさだまりよ
て、ことさらよ人をねどし、賜へること、もなく、人よ邊つら
ひよまへること、もしも、近き世よ古こと學する人の言よ、
皇國ミコクニ、皇御國スミラミクニ、皇大御國オホミクニなどいふこと、つねなれど、それも外
國のことをるらべいふよ、それよまざれば、あさめよ、どり

わきていふよハ止こと得ずしてきもいふべきことなれ
む。後世俗儒の説みまどひて、うけむりて倭國日東あどや
うよいふ徒此耳を驚しつべけまばかの漢國よて己が志
る國を中華などわれだけく^ホこりいへるを志とよハう
らやみていへる志わざもあらざるべし。かく天地の間
よ二、なく尊くく^一びなる萬國の大君よ坐ますを天地の
長く久しき間よハ荒振神の邪事^{アラブル}にあひくち^{アガコト}ひまどこ
とてくれとぶれいや^一き奴む。たふ事なくも皇朝廷よ射
向^カひまつりてとはまげをな^ス大君の大御心をあやま^ス
ま^ホり^ミと^イめ^ハも^ハなきよ^ハあらねどつひよハ大御徳よ

けたされて、あとうとなくをるびうせぬるハ。かけまくも
か^一と^一けるまきことよあらびや。かく天雲のむらぶすかぎ
り。谷ぐ^一のさつとるきをみてりとも照^スわたり。をみとも
清とやらせる。天つ日繼の大御徳なれば。前よ云るごとく。
人の言語の清音ハ。上よ位して天子よ配^{アツ}て奉^{マツ}ま^スり。故その
上よ位する言をむ。古より今よい^一とるまで。濁る音ハ百よ
一も。てもれてもま^一とへ^一とることなく。其天皇の天地の間
よ。ま^一となく^一き^一を^一めて^一尊^一く^一ま^一し^一る^一を^一こと^一も。言靈の清亮微
妙なる理よ。はやくいち^一ゆる^一き^一こと^一な^一れば。神代より言靈
の國とを^一よ^一へ^一申^一せる^一こと^一なる^一を^一世^一の^一ぬ^一る^一こと^一學^一する

徒も。それまでハ思ひ至らばして。古言をさとるハ。古風の
歌よみ。文かくべき便よのみをること。意得。神道者など
と云よいさりて。道理をさきとしていふ。なかわろき
とせの。きよくのぞこらばるが故なり。志ののみふあらば。
天下此道。千すぢ百をぢよして。いづれをよしとし。いづ
れをあしとせむことか。さく。定めてハいふべきよあらざ
きども。各とぢひふ。己が好むをぢふ心ひある。ならひる
れむ。我方をひさをら尊尚^{タツト}び。他方をみだりよ賤^{オト}しめ賤^{イヤ}し
むろハ。俗諺^{コトワザ}まいをゆる。わが家の佛尊しと。いふものよ
て。まことよハ何事も。その優劣尊卑ハわきがときを。其中

よ。己が本國を尊みて他國を卑おむるハ。かのもろこしハ
聖人といふもの。教よむかなひされむ。是を實の道理な
りと思ひゆるしであるも。なを古を信ずる心のうをく。て。
學^{マカ}の力ともしき。故なり。諸國の中よ。何事も勝^{スベ}れとると
劣^{オス}れると。なく。て。なをばる理なる。かうへよ。獨勝^{トク}れて實
よ何事も正しきハ御國よして。ことよ音聲言語の萬國よ
類なく。はる。よよをぐれとること。上よ委しく論へる。如
くなるをや。さて右よ云る如く。上よ位をる音聲言語の清
亮微妙なること。つひふ幾萬代を經ても。かりよ。いひ
あやまつことなき。大御徳の千萬御代まで。あけず。うを

らおび坐すよ全同ト理なり。言語ハ時代よつれて、古と今
とうつろひかされること。幾とびといふ數を志らばとい
るども、上よ位をる音をバ、つもいひあやまちて濁れるこ
とのつひふるまひ、あやしく妙よ尊くありがとまきことそ
るたか、れば御國ハ、萬國の宗として萬國の首よ位し。稻
穀をはしめ萬の物も事も、萬國よをぐれて美さく好むし
きことハ、言靈の微妙なる一みあらされたり。次よ假濁ハ、
中よ位して保佐よ配れり。故、その中よ位をる言ハ、もと生
まから濁ることなく清音なれども、なを連聲の便、よより
て、姑、假よ濁ること、あとへバ天下の大御政を攝り關り白

す人ハ、系統もことよ清亮よ、徳業もをぐれて盛隆よを
れども、なを皇統の大御徳を、かこみまつらで、ハ、
むざる理なるが如し。さてその大御政申す人ハ、古ハ皇統
よものなり賜ふべきまはより執申すとまひ、その後皇列
をはなれても、系統種姓よハ、清く、さるべきまきりあ
ることありて、他姓の人よりの執申すことあり、れむざる嚴制
ありて、いよよ時を得て徳盛なりといへども、その家なら
でむかりよものなるべきことあをば、あられども又後
の世よ、種姓さやならざり人の時の勢を得て、姑、入
むまで、のぼれる例なきよハ、あらば、そもく天皇ハ、悪く

もまゝに善くもすませ。他人よりうゝふこといひ
なれば、皇列ののぎりよすまざる事にてハ、一日も大御位
を犯すことあるを、大御政申す人ハ、志の
はあり、嚴制ありても、なす時の勢を得て、志をらく犯せる
事もあるハ、理もていへむ。道よ叶はば、義よそむけること
なり。といひ、いへども、なす一日よても入かそりぬるハ、
あなかくも皇統ハ、かけても及び、ふとき證る。か、れ
む生るから清て濁ることなき音をも、假よ濁るハ、なす上
の大御徳よ氣おさる、理よて、これ上よ位を清音の古
より今よいとるまで、百ふつもわすれてもよごることあ

きよて、立及びかとき理なれむ。中よ位すといへるあり。
其次よ、濁と半舌ハ下位にて臣下あされり。故、その下
よ位する濁音の言ハ、生るからより定て濁きり。その濁る
音ハ、二音よまれ三音よまれ、幾音にまれ、言の中尾よあり
て、首よ濁れるハ、一つもあらず。こき臣下あされること前よ
云るお如く、其證明白ハ、半舌音よこれよ同ナ。志あるハ
外國言ハ、首を濁る音と、首よおける半舌音との多きハ、
其國の首領も、なす御國の臣下よ異なるらば、されば濁る音
と半舌音とハ、御國よてハ、いつも言の中尾を出ることあ
るを、外國よてハ、首中尾の差別なきがゆゑ、その

首領^{カシラ}も、此方の臣下の列は位せるみよりて、かくハハハなる
 り。さて言語^{カシラ}けうへよていへむ。その首を濁る音と、首はね
 ける半舌音とハ甚不正^{キタナク}して、鳥蟲器物の聲は然^サしくも異なる
 ることなきが故よ。今此書よハ禽獸^{オト}小貶して列ねたり。故
 かのあら國などみて、みづゐらごとく、天子と名のり。
 二、なきものよいひをり、ものも、時きとりて徳おとるへ
 ぬるときハ、他ハ國を奪えれ、おひねとされて下民よくど
 り、下民の列小居てかそゐなり、ものも、時いとりて徳盛
 るるときハ、國を奪ひ位を得て、國のかしらと重みせら
 れ、みづゐら天子と名のりて、なごり居ること常なれど、ま

ことよを尊卑のあらわれわられず、此方より見れば、禽獸の行
 よさ、も異へること無が如し。あく皇統の稜威と共に、言
 霊の尊き理を思ひ定め置て、左の畧圖を見べきことなり。

音	御	天	皇	后	妃	太子	王子	公	侯	伯	子	男	大夫	士	大夫	士	大夫	士	大夫	士
正音之圖	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下

言靈惠用

保佐 位中				天子 位上			
ハ	タ	サ	ガ	ハ	タ	ナ	カ
ビ	チ	ジ	ギ	ヒ	チ	シ	キ
ブ	ツ	ズ	グ	フ	ツ	ス	ク
ベ	テ	ゼ	ゲ	ヘ	テ	セ	ケ
ギ	ド	ヅ	ゴ	ホ	ト	ソ	コ
<p>可佐多波、四行の濁音を攝る言も、香木などの如く、一音の言も濁る例なく、又二音の言も、神君などの如く、首を濁ることなきこと、いづれも准知べし、又三音四音の言も此も准べし、古言ハさらにもいへば、後の世に今に至るまで、うるこき歌詞など、百ふつもあやまりて濁るとることなし、この故も清音ハ上位、天子も配れり、可佐多波、四行の、もと清音なる言も、連聲の便りよりて、濁ることあること、山川などの朝霧などのギもいづれも准知べし、この故も假濁る音ハ、中位、保佐もあされり。</p>				<p>可佐多波、四行の濁音を攝る言も、香木などの如く、一音の言も濁る例なく、又二音の言も、神君などの如く、首を濁ることなきこと、いづれも准知べし、又三音四音の言も此も准べし、古言ハさらにもいへば、後の世に今に至るまで、うるこき歌詞など、百ふつもあやまりて濁るとることなし、この故も清音ハ上位、天子も配れり、可佐多波、四行の、もと清音なる言も、連聲の便りよりて、濁ることあること、山川などの朝霧などのギもいづれも准知べし、この故も假濁る音ハ、中位、保佐もあされり。</p>			
假濁音				清音			

臣下 位下			
ラ	バ	ダ	ガ
リ	ビ	チ	ギ
ル	ブ	ツ	グ
レ	ベ	テ	ゲ
ロ	ボ	ド	ゴ
<p>我射陀婆、四行の、もとより濁音なる言の中尾のみあること、長流などのガ、龍限などのギもいづれも准知べし、良理留礼呂の五音の半舌音ハ、一音の言ハさらにもいへば、二音三音の言も首よかくことなく、みれ言の中尾のみあること、腹孕などのラ、塵拾などのリもいづれも准知べし、以上濁音と半舌音とハ、下位、臣下もあされり。</p>			
半舌音		濁音	

上件の三品を意よ得て、言語の尊卑位置をわきまへて、古言をよみこゝろむるときハ、いさゝかのど、こちり疑ふをぢなくして、清く正しくてあるぬことあま、そむく御國の言語ハ五十音よして、五位十行相連きて、各縦横音韻調ひて乱るゝことなく、其音單直雅正なるがゆゑ

よ。彼此、小相涉りてまぎらはしきこともなく、言は随て
轉換相通伸縮等の軌則をもて活用ハタラカすとき、千言萬語を
なすといへども、この五十音よりしてとらざる言もなく、
餘れる言もなき故よ。一も刪クくことあさむべし。又補ゾクるこ
ともあさむべし。凡そ人の正音ハ此は全備ツナハれり。さればこ
の五十の外ハ、みれ外國の言よりして、鳥蟲器物の聲は類
ひて、不正鄙俗の音なりと知べし。されば此理をわき
まふるときハ、甚もやをらるゝよりして、外國の音韻悉曇の
ことわりなどをからずしてこととることなるを、をべ
て外國ハ物のことわりをこちとくワづらむハくいふ

ならをしなるよりして、この音韻をもて、五聲五行五方
五時などハ配アテ其他種々の子細をいひさてゑるよまよ
ひて、漢國の音を華音といひ、御國の音を馱舌などい
もへるハ、ゆゑにきとふれ心なり。そもく音聲の單直正
雅なることハ、御國をおきて天地の間は又なき理なる
を、其をワせて外國は志よをるハ、いなるまどひそ
や、されば右の三品ハ言語の活用をワきまふるときは、
神代よりつとせれる。人の言語ハ優れて尊きことをも
ひきまふバく、その三品の五十の外は出ず。その五十の
外は出さるハ、外國人の言語、鳥蟲器物の音聲よりして、鄙イヤ

禽獸	●	●	●	●
○ _ハ	●	●	●	●
○ _ヒ	●	●	●	●
○ _フ	●	●	●	●
○ _ヘ	●	●	●	●
○ _ホ	●	●	●	●
○ _キ	●	●	●	●

波比布敷保五音の清濁の間はありて濁音を呼ぶとくは層を彈て清音と呼ぶこれを世は半濁音と云漢國にてこれを清音とせり結髪などのハ橋皮などのハ髮膚などのフの類なり此方よは後世の俗言或ハ軍書又漢籍讀などハナンピトアツパレなど云類あるのみよて今世とても歌書などのうへよてハ此をまらふることつもあることなければくさくさく及まばこれの上よ急切音と閉口音といへるは連ね呼はかざれり上よつまる音との不正音と云はひうれらるゝといはれりさればこの半濁音も外國の言并鳥蟲器物の音よ比ひて禽獸よ配れり

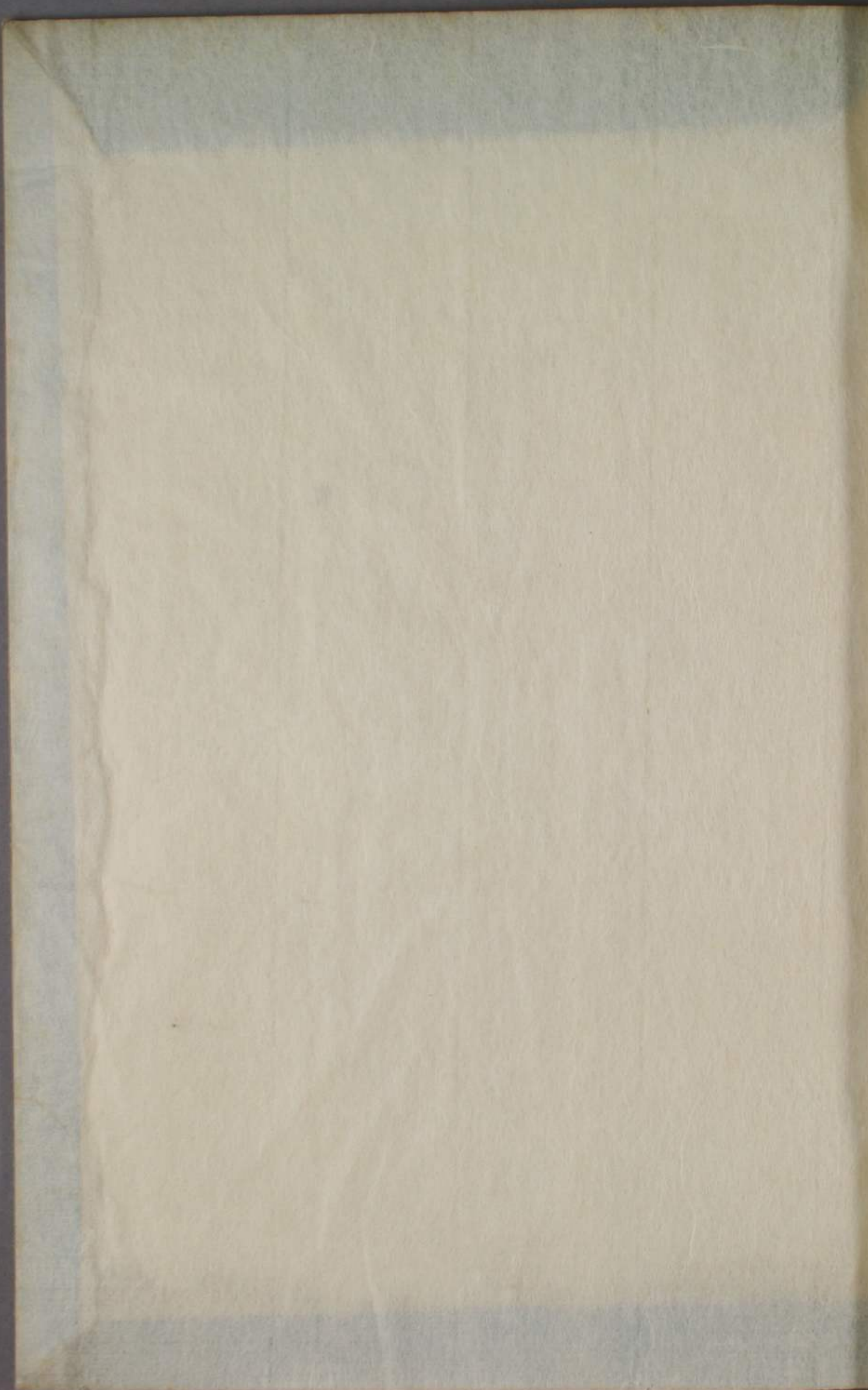
一音の言ハさうよもいそげ二音よまれ三音よられ言の首を濁ること古言みなきこと前よ云ろ如しその濁音の言の中尾よありても言を置ねて濁る例なりされば今世タビビトウヂガハなど云ハ誤るなりこれも外國の言并鳥蟲器物の音よのみあること知べしさればこれ疊濁音をも禽獸よあてたり

半濁音

禽獸	●	●	●	●
○ _ハ	●	●	●	●
○ _ヒ	●	●	●	●
○ _フ	●	●	●	●
○ _ヘ	●	●	●	●
○ _ホ	●	●	●	●
○ _キ	●	●	●	●

字音の布都久知伎の入聲の韻を富貴結髪惡口吉祥石花など連ねるととき留結惡吉石などをフツケツアウキツセツと常よつめて呼ぶ如しこれ字音よてハ入聲よかきりくろくあり此方の後世の言よハ入聲よのうらば真人をツト夫をツト祝詞をツト欲をホツト呼ぶひ多しこれ後世の俗言或ハ漢籍讀などよあるのみよて古言よさうよもいそげ中音まも雅言よあちこと今世とても歌書などのうへよこれまトへよむこといさうもな々れが委くさく及まばこれの急切音も外國の言并鳥蟲器物の音よ比て禽獸よ配れり

急切音



余	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
...

